

氏名(本籍)	高橋未来(東京都)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博甲第3872号
学位授与年月日	平成18年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	杜牧における政治と文学
主査	筑波大学教授 博士(文学) 松本 肇
副査	筑波大学教授 博士(文学) 新保 邦 寛
副査	筑波大学教授 博士(文学) 芳賀 紀 雄
副査	筑波大学助教授 小松 建 男
副査	筑波大学教授 博士(文学) 丸山 宏

論文の内容の要旨

本論文は、杜牧における政治と文学について論じたもので、構成は以下の通りである。

序論 なぜ「政治と文学」か

第一部 杜牧における「甘露の変」体験の意味

第一章 「昔事文皇帝，三十二韻」詩について / 第二章 杜牧における「甘露の変」 / 第三章 杜牧の宦官問題に対する態度

第二部 牛李の党争における杜牧

第四章 杜牧の党派性に関する研究序説 / 第五章 牛李の党人と杜牧 / 第六章 杜牧と李徳裕との関係

第三部 兵戦に関する杜牧の思想と文学

第七章 杜牧『孫子注』より見る兵法思想 / 第八章 杜牧の兵法思想と文学との関係 / 第九章 杜牧の辺塞を詠じる詩

結論 杜牧における政治と文学

序論は、本論文の目的と意義について述べている。中国では、政治家となるために、文学創作の能力が要求され、政治と文学は密接な関係にあった。杜牧は士大夫として経世済民を志し、政治問題を作品に詠じたが、栄達できずに煩悶を抱えて長らく地方官僚に留まった。杜牧の政治への志と煩悶が、詩人として詠じた作品にどのように昇華されたのかを探るのが、本論文の目的である。文学史上、中庸から晩唐の転換期に存在する杜牧とその時代を検討することは、時代の転換期に生きる知識人の存在意義を検討することに等しい。このような問題を論じることに、本論文の意義がある。

第一部では、宦官の専権と、その象徴である「甘露の変」を取り上げ、杜牧の「甘露の変」体験の意味を考察している。「甘露の変」とは、大和九年、皇帝側近の官僚が宦官勢力の一斉討伐を企てたが、逆にこれを察知した宦官に官僚数千人が惨殺された事変である。

第一章は、「昔事文皇帝，三十二韻」詩の制作意図についての考察である。杜牧はこの詩を、「甘露の変」の十年後に突如として著した。当時、杜牧は地方の刺史に不満で中央復帰を望んでいた。そこへ皇帝の交替によって昇進の可能性が生じたので、杜牧はこの詩を高官に献上し、推挙を求めたのである。推挙の意図があるために、気骨ある友人の姿は描かれなかった。五言排律という、制約のきびしい詩型を選んだのも、己れの詩才を示すためである。

第二章は、杜牧の大和九年の朝廷勤務と「甘露の変」の意味について検討する。杜牧には、「甘露の変」の首謀者に抗議して定論された友人、李中敏と李中を讃える詩がある。一方で、友人の抗議行動を賞賛しつつも、遠まわしに諫める方法を用いなかったことが危険な結末を招いたと見なす冷静な視点が窺われる。杜牧は、「甘露の変」を歴史上の一事件として客観視していた。

第三章は、杜牧の宦官に対する態度を論じている。従来杜牧は、ほかの政治問題に比べて宦官問題には消極的と評される。しかし、朝廷での宦官の専権には沈黙しても、宦官が禁軍を支配する弊害には、果敢な批判を行った。それは、杜牧が国家の軍事問題に強い関心を持っていたためである。

第二部では、李徳裕派と牛僧孺派との党争、つまり「牛李の党争」における、杜牧の立場を論じる。杜牧は牛僧孺の部下であると同時に、李徳裕とも家族の交流があった。両派の党首と関係する複雑な立場にあったのである。

第四章は、杜牧は牛党か否かをめぐる先行諸説の整理と検討を行う。

第五章は、杜牧の行跡や友人関係をたどりながら、杜牧は時勢を得た党派への推挙を求めていることを明らかにする。杜牧は党争に近寄らず、党派側も党人と目さなかった。

第六章は、杜牧と李徳裕の政治観および文学観について論じる。両者は政策面で共通するものがあるけれども、杜牧の文学観は儒家的で、李徳裕の文学観は美学的という違いが見られる。以上の検討によって、杜牧は無党派との結論を導く。

第三部では、兵戦に関する杜牧の思想と文学について論じる。

第七章は、杜牧の『孫子注』にあらわれた兵法思想についての考察である。杜牧は『孫子』を儒家の観点で解釈し、兵学と儒学とを結びつけることによって、『孫子』を単なる兵学研究の古典ではなく、戦争解決のための指南書と見なした。杜牧は、陰陽思想を排斥する『孫子』の合理的、現実主義的性質を好み、人事を重視した。

第八章は、杜牧の兵法思想と文学との関係について論じている。事実と反する逆説の歴史をうたうことで知られる杜牧の詠史詩は、兵法思想と強く結びついており、『孫子注』の主題である人事の重視を、詩作に適用したものと見なすことができる。また、杜牧の著す伝記は、すべて戦中の智者を描いており、智恵と仁義の併存を重要視している。

第九章は、異民族との戦乱を詠じる辺塞詩について検討する。杜牧は伝統的手法に拠る辺塞詩を後世に残そうとしなかった。杜牧が残そうと意図した辺塞詩は、①杜牧自身の視点で描かれ、②具体的、個別的場面に即し、③異民族討伐の戦略と密接に連動する詩であった。

結論は以下の通りである。杜牧は、「甘露の変」に対して、正義感を抱きつつも冷静に対応し、友人の勇姿を讃えることで、自己の理念を表明した。牛李の党争の渦中では慎重に行動したが、党派の立場を超えた真情を詩文に表した。軍事問題には、実践的態度を取り、兵法思想と融合する詠史詩は、豊かな文学世界を創造した。杜牧は、栄達することはなかったけれども、真摯に政治に関わった。

審査の結果の要旨

唐代文学史上、杜牧の作品は剛直さと艶やかさという相反する二面を持つ、と指摘されている。ただし艶

麗な詩が有名になったために、杜牧は風流才子の印象が強く、政治問題を詠じた剛直な詩風の作品については、あまり注目されなかった。このような従来の学界の傾向に対して、本論文は、「政治と文学」という視点から、杜牧の剛直な詩風の作品を取り上げ、杜牧研究の新たな地平を開拓した。これは、本論文の最も評価すべき点である。

杜牧の生きた中唐から晩唐の転換期は、安史の乱後の弱体化した国家に内外の諸問題が噴出し、「宦官の専権」「牛李の党争」「異民族の侵略」の三点は深刻な政治問題であった。本論文は、それぞれ第一部、第二部、第三部で、この三つの重要な政治問題を取り上げ、杜牧がいかに関わっていかうとしたかを明らかにしている。このような本論文の構成は、杜牧の政治と文学について論じるのに、きわめて有効である。また、本論文は、第一部、第二部で、智恵を重視し、慎重な処世態度を取った杜牧の人物像を明らかにし、第三部で、杜牧の人物像の解明と作品の分析とを巧みに結びつけている。このような工夫によって、杜牧の人物と文学の全体像が浮き彫りにされた。

杜牧と牛李の党争の関係について論じた第二部で、著者は、杜牧の党派性に関する膨大な先行諸説を、最新の研究成果を踏まえて整理し、争点を明確にしなが、それらの争点についてひとつひとつ検討を加えている。また、杜牧の人間関係、および墓誌銘や書簡文を丹念に調査し、杜牧の現実的な処世態度を明らかにしている。ここには、著者の客観的な事実に基づいて議論を展開する研究方法が示されていて、充分説得力に富む。

杜牧は兵戦に関心を抱いて、『孫子注』を著し、実際の戦略も立てている。ところが、杜牧研究の専門家で、杜牧と『孫子注』との関係について論じた研究者はほとんどいなかった。第三部で、杜牧の『孫子注』に注目し、杜牧の兵法思想を解明したのは、本論文の大きな功績である。また、杜牧の兵法思想と文学作品との関連にも注目し、杜牧の詠史詩を、『孫子注』に基づいて分析したところに、本論文の独創性が認められる。「題烏江亭」「赤壁」などの作品が、杜牧の『孫子』研究に基づく、兵法家としての理解と心情を詠じたものであった、という著者の見解は、「逆説の詠史詩」という文学史上の定説をくつがえすものである。

本論文を通して、智恵を重視する杜牧の本質が明らかとなった。ただし、杜牧の慎重な処世態度について論じる時、晩唐期における儒教復興と知識人の危機意識の問題など、文化史的な観点からの考察が欠けているのが惜しまれる。また、杜牧が政治的な事件にどのように対処したかを論じてはいるが、「政治と文学」という問題の追究の仕方にやや未熟さが残る。さらに、剛直さと艶やかさというような杜牧評価の先入観に左右されず、自己の感性に基づいて作品そのものと向かい合う態度も、これからは要求されるだろう。今後に残された課題があるとはいえ、本論文の価値を低めるものでは決してない。本論文が杜牧研究の発展に貢献したことは、充分高く評価することができる。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。